

「伝統の技」で家具づくり

職
場
ポ
ル

—株式会社山ノ木—



●特集●プロフェッショナルとして働く

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

取材先データ

株式会社山ノ木

〒641-0036 和歌山県和歌山市西浜1660-284
TEL 073-445-8087 FAX 073-446-0579

keyword: 聴覚障害、製造業、障害理解、人材育成、アビリンピック

POINT

- ① 腕と人間性を磨きながら、伝統技術を習得
- ② 先輩の技術を見て覚える。
聴覚障害の後輩に教えることで、自身も成長
- ③ 全職人が資格をもち、技能賞なども受賞

WORKSHOP REPORT



和中輝雄社長

世界に1つ、 オリジナルの家具をつくる

和歌山市の中心街から南へ走ると、和歌山南港近くに「株式会社山ノ木」の本社工場がある。社長の和中輝雄わなかてるおさんが、手づくりのオーダー家具専門店として1974（昭和49）年に創業、1990（平成2）年に法人化した。釘を使わず、木と木を組み合わせ、孫子の代まで受け継がれる質のいい、オリジナルの家具をつくる。伝統の技への誇り、ものづくりへの厳しい目。モットーは、「お客さんの注文に対して、絶対に仕事の手を抜かない」。手を抜くと、家具は長持ちしないという。

「職人魂なまこころ」あふれる和中社長は、「社長と呼ばれるのは嫌い」といい、従業員から「おやじさん」と呼ばれている。「生まれ変わったって、もう1回職人になる。この仕事

が好きなんです」と思いは熱い。「いまの近代的な家具は、洋服ダンスとか本棚など簡単なものでしたら、ある程度までは器用な人はつくれます。釘やビスを一本も使わない伝統技術でつくる家具は、一からきっちり教えないとできない。湿度や温度によって伸び縮みする無垢材むくぎの性質を熟知して、ホゾ組や蟻組ありぐみなど、高度な技術で製作しなければなりません。しかも、人間の性格が出ます。家庭でのごたごたがあったりしても、作業に出てしまうのです」

和中社長は若くして職人の道を選んだ。「そろばんが得意だったので銀行に勤めることも考えたのですが、銀行員になつたら1年もたなかつたでしょう。15歳から住み込みの修業を始め5年間、そしてお礼奉公の1年を経てやっと一人前の職人となったのですが、ロッククライミングや冬山が好きだったので、自由に休みがとれそう



だと思い、31歳になって職人から商売の道を選びました。しかし、オーダーシステムは納品の日が決まっているので、忙しくて山には行けませんでした」

独立後ほどなく、腕を見込んでくれた取引先との出会いがあり、注文が続いたのだ。

「気が短くて、やんちゃで有名。『あいつは3日で辞める』といわれました。1人だけ市内でも有名な会社の方が『それなら何とかする。あいつは仕事ができる』と、ずっと注文を出してくれたのです」

テーブル、いす、下駄箱、食器棚、本棚や、高機能化が進むテレビボード、システムキッチンなど、「人と環境に優しい家具」や「近代技術と融合した家具」を手がける。

「昔は、伝統家具を気楽にオーダーしてくれましたが、いまは機械で生産する家具に比べると高額なこともあり、『家具を含めて家を設計する人』と、『家具は出来

ショールームに並ぶ「山ノ木」の手づくり家具

※ ホゾ組：木工の伝統工法から引き継がれた継手（ホゾ・ホゾ穴）による接合方法
蟻組：天板など、木材の割れや反りを防ぐ接合方法



鈴木真道さんのアビリンピックのメダルなどが
ショールームに飾られている

合いで家を設計する人』の二手に分かれま
す。自分の想いが伝わる家具の好きな人
から、主に注文を受けています」

「お客さんの気持ち」で つくり続ける

従業員は、設計や経理担当の人たちを
含めて11人。そのうち職人は6人で、3
人に聴覚障害がある。1981年、最初
に入社したのは鈴木真道さん。勤めていた
滋賀県の織物工場が倒産したため、入社
した。現在65歳。作業の段取りを任せら
れている。

「鈴木の場合は、『大工をしたかったので紹介
してほしい』と知人をおして来たのです
が、大工よりも家具に向いている体つきを
していたので入社をすすめました。入社時
から図面の解読ができましたし、口話がわ
かり、物覚えが抜群に早かった。理解も
早く、とんとん拍子に成長しました」と
社長は評価する。耳が聞こえないことへの
戸惑いはあまりなかったという。

「ただ彼は、まわりで話していたら、疑
心暗鬼になり、自分のことをいわれている
のではないかとじっと人の顔を見ていたの
です。『気にせんでもいい。鈴木のことを
いうときは、ちゃんというから』と話しま
した」

鈴木さんは1995年、オーストラリア・
パースで開催された第4回国際アビリンピ
ックに日本代表として出場した。「家具製

作技能士1級」と「職業訓練指導員」の
資格を持つ。

「私は、小さいときから模型作りが趣味
でした。聞こえませんが、先輩方の技術
を見て、覚えしました。いままでの仕事では、
新築の家のシステムキッチンをつくったこ
とが印象に残っています。仕事を何でもさ
せてもらえるので、やりがいがあります。
家具づくりで大切なことは、お客さんの立
場になって、お客さんから『きれいで、い
い家具だ』と思ってもらえるようにつくる
ことです。自分ではだいたい納得できるも
のができていると思っています。定年は過
ぎましたが、倒れるまで働きたいですね」
2007年には、「和歌山県技能賞」を
受賞した。「うれしかったですが、自分と
してはまだまだだと思っています」
趣味はボウリング。休日には、聴覚障
害者協会などの手伝いやイベントに参加
するなど、対外活動も行っている。

経験20年。 一人前の職人に

山原耕一さん(44歳)は、1992年の
全国アビリンピックで鈴木さんが優勝した
とき、東京代表として出場し、3位に入賞。
当時は東京の木工所で働いていたが、故郷
の和歌山に戻った。叔父が木材関係の仕
事に就いていた。

「故郷のろう学校の先生にこちらを紹介
されて、入社しました。最初のころは何も

準備作業中の鈴木さんと、山原さんの手がけた家具



わからなくて、たいへんでした。少しずつ
技術を身につけてきましたが、いまでもま
だまだです。親方から『ここは違うよ』と
厳しく指導されながら、仕事をしていま
す。そのなかで少しずつ成長してきた感じ
です」

辞めたいと思ったこともあったとか。
「家に帰って相談したら、『もう少し頑張

WORKSHOP REPORT

自然塗装液を使って
作業する山原耕一さん



「山原は、一番よく叱られました。作業の順番を自分流でやるので。またよく休むので、『給料ももらっているのだから、ちゃんと仕事せい』ともいいました。独特の組み方をするので、できるのか心配するところ

「山原は、一番よく叱られました。作業の順番を自分流でやるので。またよく休むので、『給料ももらっているのだから、ちゃんと仕事せい』ともいいました。独特の組み方をするので、できるのか心配するところ

「山原は、一番よく叱られました。作業の順番を自分流でやるので。またよく休むので、『給料ももらっているのだから、ちゃんと仕事せい』ともいいました。独特の組み方をするので、できるのか心配するところ

「山原は、一番よく叱られました。作業の順番を自分流でやるので。またよく休むので、『給料ももらっているのだから、ちゃんと仕事せい』ともいいました。独特の組み方をするので、できるのか心配するところ

段取りは社長と共同作業。技術を習得中

「山原は、一番よく叱られました。作業の順番を自分流でやるので。またよく休むので、『給料ももらっているのだから、ちゃんと仕事せい』ともいいました。独特の組み方をするので、できるのか心配するところ

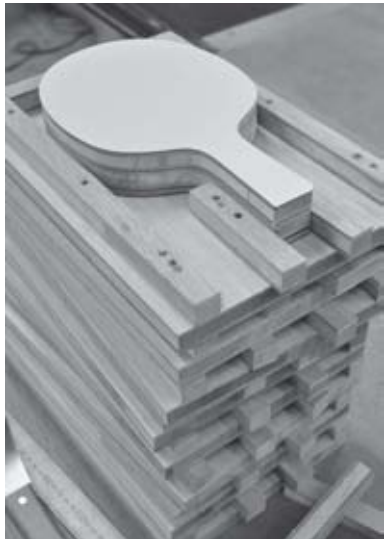
「山原は、一番よく叱られました。作業の順番を自分流でやるので。またよく休むので、『給料ももらっているのだから、ちゃんと仕事せい』ともいいました。独特の組み方をするので、できるのか心配するところ



サンドペーパーで磨き作業をする堀健次さん



堀さんが担当する卓球のラケット。
製作中の板が貼り合わされ準備されている



社して13年になりますが、きちんと仕上げるのはまだまだむずかしい。先輩の技術に追いつくのが目標です」

休日は友達と遊びに行ったり、有田方面に釣りに行ったり、本を読んだりして、息抜きをしている。

伝統技術は「見て」覚える

「親方はどんな人？」とたずねると、山原さんと堀さんはしばらく考えて、「偉い人です」。鈴木さんは「障害を理解してもらっています。何度も辞めたいと思いましたが、引き留めてくれました。仕事は仕事できちんとやりますが、アットホームな会社で個人的なことにも相談に乗ってくれます」

社長いわく、「みんな手話ができないので、健常者と障害者の人数のバランスは大事です。健常者が障害者に対して複雑なものの方とか、教え方をしているのを聞いたら、辞めさせるといっています。」

聴覚障害者だから特別ということはない。だけれども組んで、話し合っって仕事をしていきます」

月曜日の朝礼では、今週の仕事、作業工程表、連絡事項などをホワイトボードに書いて伝える。鈴木さんとは口話、山原さんとは大きな声で、堀さんとは筆談でコミュニケーションを図る。安全面では聴覚障害者と健常者とで、差は設けてないという。

「耳が聞こえない人たちは目で見て作業をしています。機械に安全カバーをつけなければならぬのですが、つけるのと直接見えないので、余計不安になるところはありますね。ただ、気をつけなければいけないのは、図面が完璧でないのにそのまま進んでしまっって、『お前、間違いに気がつかなかったのか？』ということがたまに起こります」

ひとつの家具は、原則1人の職人が担当する。責任は大きい。顧客に満足してもらえたとときの喜びも大きいはずだ。

「職人は全員が、『家具製作技能士』の資格を持っています。厳密にいうなら、資格がなかったら、現場に入れないんです。現場に入るには、作業員名簿を出します。特に官公庁の家具を取付施工するときには、資格が必要なのです」

山ノ木では、1年に1回、全員のつくったものの評価をしている。「伝統工芸の技術は、手とり足と

りでは覚えられない。見て覚えなければ、伸びないんです。きちんと見ていたらできるのに、みんな見ていない。見て覚えるのは、いまの若者には厳しいな。やる気がないと、まずだめ。鈴木は大きな仕事を任せても安心、山原はやっと大きな仕事も任せられるようになりました」

「腕」+「人間性」も磨く

時代とともに、徒弟制度も厳しくなくなり、伝統家具のデザインも変わり、設計図も手描きからパソコンに変わった。

「手で描くと脳が動き、いろいろな発想が出てきます。間違ったら描き直さなければならぬので気をつける。いまは、人がパソコンに使われているのではないでしようか。『まずは手で描け』というのですが、若い人たちは昔のことは知らずにパソコンですつときていますから、なかなかむずかしい。仕事中に、どちらが兄弟子かわからんような口を聞いたりすると、『仕事中は仲よくなるな』と怒ります」

「親方」の目で見ると、出来上がりも昔とは全然違うという。

「昔は、スリットと流れるようにつくりました。『最初に30分でも1時間でも図面を見て、頭で描け』というのですが、いまの子はいつたときはそのようにしても、すぐワーツと始めてしまっって、工程ごとに止まっって考える。次の作業がわかって進む人間



「現代の名工」
和中 健さん

と、1つずつ止まって考えなければあかん人間に分かれている。流れるように進めていったほうが、仕事は美しいんです」

デザインは、「身内みたい」と紹介された専務取締役の山田知子ともこさんが担当する。

「お客さまのご要望が第一ですので、まずご要望をお聞きしてデザインに入り、つくる側とも相談して、打ち合わせを重ねて、お客さまのご要望にできるだけ添わせていただきます。3人との打ち合わせは基本、口話と筆談ですが、図面を見れば、ある程度わかってもらえます。口頭で伝えなければならぬときは、健けんさんの話し方がいちばんよく伝わるので、間に入ってもらっています」

健さんは社長の息子で、「現代の名工」

を受賞。職人のチームリーダーとして活躍している。社長は、それぞれの職人を厳しく指導してきた。

「うちの伝統技術を習って巣立ってほしいと思います。昔は偏屈へんくつでも通りましたが、いまはコミュニケーション、協調性が大事です。『1つ1つ足元を見て、うぬぼれるな』、『人に教えられるような職人になれ』、『腕だけではなく、人間性も磨け』といっています。教えることができないと、自分も伸びない。名工になっても、技術や人間としてはまだまだ伸びるんです」

そのお手本は健さん。穏やかで、謙虚だ。「健さんの場合は父親が反面教師。反対のことをしていたら、いまのようになつた」と山田さん。息子をほめることはできないが、みんなが息子のようになつてほしいと、社長は秘かに願っているようだ。

伝統技術を継承したい

2階の作業場を訪ねると、健さんがオーダーメイドの椅子6脚をつくる準備中。別の部屋では、山原さんが塗り作業。健さんがアメリカに行ったときに出会ったという、身体や環境に優しい自然塗装液を使う。堀さんが真剣に手を動かす。その横に貼り合わせたラケットの板が積み上がっている。

1階では、鈴木さんが段取りの作業中

だ。忙しいときは、大きな板を裁断する機械など、全部の機械がフル回転するそうだが、その日は静かだった。職人として名を遂げた社長に、経営者としての思いを聞いた。

「バブルがはじけて、日本がえらいことになったときも、1人も解雇することはしなかった。そのおかげで技術の継承ができ、いまがあると思います。伝統技術を守ろうとしたら、家具だけをつくっていても厳しいときには、本業の合同を見てラケットをつくれれば経営が安定する。おかげさまで『一流の家具職人がつくるラケット』として評判をいただいております。そういう仕事をもちながら、技術を継承していく。経営的に少し余裕を持って、お客さまが安心して注文を出せる家具をつくっていきたいと思います」

和歌山県全体の家具の伝統技術を上げていきたいと、「県創作家具展」を企画、今年で6回目を迎えた。

「伝統技術の家具をつくれる会社をもっと増やしたいと思っています。教えてくれる人がいないと、技術は継承できない。みんなに『仕事を見にこい』と話しています」

障害に関係なく、伝統の技を極めるには一生研鑽けんざんが続く。和歌山市中心街のショールームに陳列された無垢材の美しい家具を見て、日本のものづくりの素晴らしさが生き続けてほしいと願った取材だった。